The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英国での助産士資格取得を目指して
Author(s)	中谷, 信章
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2000, 6(1), p. 61-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56680
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英国での助産士資格取得を目指して

中 谷 信 章

Obtaining a Midwife Qualification in the UK

Nakatani, N

１９９８年3月に保健学科・看護学専攻の1期生として大学を卒業した後、学生時代から抱いていた「助産士になる」という目標のために渡英しました。現在日本では男性が助産業務を行うことが法律で許されていませんが、どうしても他の仕事をしながら日本で助産士が導入されるのを待つことはできず、少数派ではありますが助産士になれる可能性のあるイギリスで助産学の勉強をしたいと思ったのです。

イギリスで勉強するためには当然の事ながら英語力が必要になり、当初英語がほとんど話せなかったため、まずは語学の勉強をしながら大学への出願準備をすることにしました。99年度の入学を目指していくつかの3年間の助産コースのある大学に出願したところ、帰ってきた返事は「イギリスで看護士の資格を取ってもう一度18ヶ月の短縮助産コースに出願しなおした方がいい」ということでした。3年のコースは原則的には看護婦・看護士の資格を持っていない人達のためのコース（Direct Entry Course）とされており、最初の１年半は看護学生と同じようなプログラムが組まれているため、看護を勉強し終えた者には向かないと判断されたようです。そのためUKCCというイギリスの看護婦・助産婦資格等の登録を取り扱うところに大学でのカリキュラムや成績、病院実習の詳細等を送り、イギリスで看護士登録するためにどれくらいの期間どのような研修が必要かを査定してもらいました。その結果（結果を受け取るまでに４ヶ月ぐらいかかりましたが）、最低6ヶ月間指導下での病院研修が必要とのことでした。これは主に日本とイギリスの看護教育のカリキュラムの違い、それと大学卒業後の臨床経験がないことによる決定だということでした。

UKCCからは、イギリスで看護婦等の資格取得のための病院研修を希望する外国人は毎年数千人を越えるため、研修病院を見つけるのは非常に困難だといわれました。実際、ロンドンで訪ねた病院ではほとんど成果が無く、中には約１年半後まで研修者が決定しているといわれた病院もあり、出願するまでもなく諦めざるを得ないことが多々ありました。そこでロンドン外の病院も考慮し始め

内科病棟のある新しいビル

外科病棟のある Old Building の入口

たのですが、ちょうどその頃偶然に出会った遺伝看護婦さんが働くサマセット州・トーントンという町にある病院(Taunton & Somerset NHS Trust, Musgrove Park Hospital)を訪れる機会があり、その方の協力もあって面接を受けることができ、年に２人の海外からの研修生は決まっていましたが、幸運にも追加で受け入れてもらえることになったのです。

研修は火災防止等の安全教育・蘇生術や腰痛予防のための講義と演習から始まりました。これらの研修は新入スタッフだけが受けるのではなく、病院内のすべてのスタッフが毎年受け、その度にこれらの事項の再確認と新しい知識を得ることが義務付けられているようです。この研修の翌日から病棟での実習が始まりました。全6ヶ月のプログラムは外科12週間・内科10週間・地域2週間の３つの領域に分けられており、現在は泌尿器科での外科実習中です。外科病棟は全てOld Buildingと呼ばれる場所にあり、そこはその名の通り戦時中は軍隊の病院として使われていたという古い建物で、廊下はロの字型になっていてジープが通っていたというほど広いのですが、'山あり谷あり' という表現がぴったりなほど傾斜が多く、ベッドや車椅子を押して歩くのも大変苦労します。

泌尿器科病棟は２０床の男性部屋と８床の女性部屋(うち２床が個室)の２部屋からなり、１部屋４床づつくらいに区切られていた阪大病院とは雰囲気が大きく異なります。病棟で働くスタッフには看護婦・Health Care Assistants (看護婦の補助的役割)・病棟の清掃や食事の準備をするWard Assistants　がおり、うち男性スタッフが約１０人、病棟長も男性です。その他に医師・PT・OT・ソーシャルワーカー、各領域の専門看護婦等がいます。詰所では仕事が一区切りする度に誰かが飲み物を用意してお喋りが始まり、メインの手術日等で非常に忙しく、詰所で立ち止まることもできない日にはあちらこちらで紅茶を渇望する声が聞かれるほどみんな休息を大事にします(心にゆとりを持とうとしているのでしょうか？)が、それでもみんな本当によく働きます。看護婦は患者さんの状況について病棟に常にはいない他職種の人達ともよく話し合い、医療スタッフ全体は非常によくコミュニケーションがとれているように思います。スタッフ全体の大きな課題は「いかにスムーズに患者さんを自宅や地域に帰すか」ということで、そのため訪問看護婦や地域の患者のサポート団体等も積極的に活用していて、ソーシャルワーカーを通してだけでなく看護婦が直接的に関わり地域との連携を図っているようです。日本で保健婦との連携ぐらいしか見たことがなかった僕にとってはシステムの多さやその活用の上手さは驚きでした。

このような環境の中で研修を行っています。イギリスの看護学生達と同様に指導者 (Mentor) についてもらい、基本的にその方のワーキングシフトに合わせて実習しています。はじめの頃は大学での病院実習を終えてから２年以上も経っていてその後の臨床経験もなく、当然の事ながら全てが英語という環境で、特に大量の医学英語、略語等 (例えばTWOC。これはTrial Without Catheter : カテーテルの抜去の略語ですが、この単語が動詞となって 'He was TWOCed.' などと活用してしまうこともあります。他

にもこのような単語が山のようにあります）で苦労することが多くあり、何をしてよいのかも分からず焦りを感じていましたが、忙しくても丁寧に指導してくれるメントーや他のスタッフの「自信を持って！」との励ましで、今ではこの実習を楽しめるようになってきました。

イギリスで看護士になるということが留学していることの最終目標ではないですが、患者さんとの会話、患者さんに行う全てのケアを通してイギリスでの看護や医療を学び、次へのステップ、「助産士になる」という目標に向かって頑張りたいと思います。

左から:学生、スタッフナース、スタッフナース、ヘルスケアアシスタント、メントーのHannah